

調馬索

調馬索は騎乗前の準備作業として、また、あらゆる状況下における矯正手段として、とても有効である。我々が調馬索を行う場合、大きく分けて次の4種類の馬に対して用いられる。すなわち、若馬、古馬、矯正馬、病馬である。

[1] 若馬

若馬においては、装鞍した際に背を張ったり、騎乗後騎手の負重に対して苦痛を感じて跳ねたりするため、前もって調馬索にて馬の心身をほぐすために用いる。

若馬というものは、自分自身で動く場合は自らのバランスで自由に動けるものであるが、鞍や人間の負重を強いられると、それまでの自らのバランスが崩れ、違和感を持つものである。そのため、前もって調馬索をおこなうことは、馬の心身をほぐすのにとっても有効で、その後の装鞍、さらには騎乗を容易にする。また調馬索を通して、人馬間の親睦を図るのに大変に役立つ。そのほか、調馬索というものは輪線運動であるため、馬体の柔軟、特に肋の柔軟に効果がある。しかし反面、無理な調馬索は若い馬にとって四肢または後躯に負担がかかるので、十分注意して行わねばならない。若馬に対する調馬索の最大の目的は、人馬間の親睦を図ることと、輪線運動に慣らすこと、そして馬体の柔軟を図ることである。

調馬索を行う時間は約20分で、頻繁に手前変換をするほうが良い。若馬に対して20分以上の調馬索を行うことは、馬を疲労させるので避けたほうが良い。また、頻繁に手前変換を行うことは、馬体を左右均等にほぐすのに効果があり、そのことによって馬は両手前の動きになれることができる。

[2] 古馬

古馬の中には、弾発の失われた馬や背の弱い馬などが含まれるが、調馬索によって新たな弾発の回復が得られ、また背に対する負担も和らげられ、さらには歩様の改善にも効果がある。

馬というものは、長い間騎乗されると、多かれ少なかれ背または腰などが痛んでくる。そのような状態で初めから騎乗するというのは、馬にとってかなり苦しいものである。

騎乗前の準備作業として調馬索を行うことは、騎乗後における作業を容易にする。すなわち、調馬索

作業によって馬の背はほぐされ、馬は比較的無理なく騎手の負重および扶助操作に従うことができる。

もし馬が自分自身の身体のどこかに痛み（跛行以外のもの）を感じていた場合、騎乗後即座に騎手の要求に従うことは、そのような馬にとってはかなり苦しいものである。だから、騎乗前に調馬索を行うことは、馬の精神面および肉体面から考えても有効である。

しかし、もし騎手はその苦痛の原因を知り、それを少しでも和らげてあげたら、馬は騎手の要求に対して快く従ってくるだろう。そういう意味でも我々は馬の状態を良く把握し、調馬索を利用した方は良い。そのほか、調馬索にてキャバレッティ作業および障害飛越作業を行うことも可能である。

このような作業を通して、短節な歩様を示す馬もその歩幅を大きくすることができ、さらには新たな弾発も回復されてくるだろう。また調馬索による障害飛越も飛越調教の一手段として有効である。

調馬索を行う時間は約40分とする。古馬の場合、若馬に比べ体力があり、また調馬索に対してもすでに慣れているので、これくらいの時間は可能である。しかし、あくまでもそれぞれの馬の状態に応じて時間を短縮または延長するべきである。

[3] 矯正馬

矯正馬の中には不良体型のものがふくまれる。たとえば、鹿首の馬、背をそらす馬、首が短く硬直している馬などである。これらの馬は騎乗に際し頭頸の前方下方への低伸が難しく、また内方姿勢をとるのが難しい。これらの多くの原因はほとんど不良体型からくるものなので、調馬索にて特別に矯正する必要がある。矯正手段として、補助道具を用いて行うことができる。

補助道具には、サイドレーン、シャンボン、変形折り返し手綱などいろいろある。矯正馬のほとんどは、頭頸の低伸および内方姿勢の確立に欠けているので、主にサイドレーンまたはシャンボンを利用する。

サイドレーン使用の場合は、主に内方姿勢の確立にその目的がある。馬というものは一般的に左右不均等で左右のどちらか一方の内方姿勢が容易にできないものである。その場合、不得意な手前の内方サイドレーンを基準より少し短くし、外方サイドレーンはいくらか長めに装着する（外方肩が屈折しない程度）。そして、多少小さな円にて馬のテンポを乱さないようにしつつ、馬が内方サイドレーンに対して譲るまで旺盛に推進する。そのためにも調馬索手は馬より外方にしっかり押し出すようにす

る。それによって外方に馬が出て来れるようになると、内方サイドレーンに対して譲りを示してくる。

そのほか、ハミに対抗したり、または頭をどうしても下げない馬に対しては、一本のサイドレーンを馬の両前肢の間から腹帯に装着し、留め金の方は水勒固定革（水勒の両環をおとがいくぼの下側で固定した環つき革）の環にとめて推進する。

またはシャンボンを利用して頭頸の低伸を求めることも可能である。シャンボンの効果は、後肢の踏み込みによる背の盛り上がりと頭頸の低伸にあり、顎の譲りには多少難がある。主に顎の譲りを求める場合はサイドレーンの方が良い。

しかし、これらの補助道具はあくまでも補助道具であり、決定的なものではない。馬によって、それらの補助道具を理解する場合と理解しない場合がある。騎手は、それぞれの馬の状態をよく判断し、的確な補助道具を選択し使用するべきである。矯正馬に対する調馬索は特に難しく、かなりの危険性を伴っている。入念な配慮のもとに旺盛な推進を行う必要がある。

そして最も注意すべきことは、絶対に馬を後退させないということである。補助道具を装着しての調馬索の場合、馬は苦痛から逃れようとして後退という動作に移り、さらには立ち上がって倒れるということがある。そうすると馬は補助道具で頭頸を固定されているため、頭または首の骨を折るという危険性が生じる。それ故、馬に補助道具を装着する場合、徐々にその補助道具を馬に慣らしていかなければならない。

補助道具を用いた調馬索を行うのは熟練者に限り、初心者は避けるほうが望ましい。調馬索を行う時間は約40分とする。しかし、矯正馬に対する調馬索の時間はあくまでも馬の状態に応じて考えるべきで、過度の調馬索は、かえって馬を疲労させるので避けるべきであり、その場合は騎乗を避け、調馬索のみにする。そして、馬の状態を目的とした場合は、調馬索の時間を短縮した方が望ましい。

[4] 病馬

病馬においては、保健運動または再騎乗に備えての準備運動として用いられる。鞍傷のある馬や口内炎をおこしている馬（カブソン使用）などの場合は、保健運動として用いられる。しかし、四肢に故障のある馬の場合は調馬索は行わない方がよい。また、たとえ回復していたとしても、何かの拍子に肢をひねったりして再び跛行したりすることがあるので、そのような場合はむしろ引き馬をした方が無難である。

病馬に対して行う調馬索の時間は、約20～40分とする。特に長い間休養していた馬を調馬索するときは、馬が元気がよいので十分注意し、できるだけ跳ねさせないようにする。この時期によく肢や腰をひねったりするからである。そのほか、調馬索は騎手の基本姿勢の養成や軽乗にも利用できる。

このように、調馬索はあらゆる馬およびあらゆる状況においてその利用価値は高い。しかしその反面、調馬索は騎乗するのと同じくらい難しいので、よく馬の状態を判断し、騎乗に役立てることが大切である。

調馬索作業

調馬索作業に必要な道具は、調馬索（約7～8m）・追いムチ・カブソン頭絡・水勒・調馬腹帯・サイドレーン（2本）・肢巻き・人参などである。

また調馬索用の馬場としては、円形の屋内調馬索用馬場は直径14～15mが、馬を静かにしてかつ合理的に実行できるので最も望ましい。それ以外には馬場の角を利用することも可能である。この場合、円の開放部に横木や支柱またはそでなどを利用して馬の逃避を防ぐ。そのほか、円形の馬場を掘り固めるか、または、円形に俵などを積み重ねかして、特設の調馬索用馬場を作ることも可能である。このようにして、調馬索に必要な装具および馬場を整えたら、いよいよ実施に入る。

初めは、若馬を調馬索する場合であるが、これが最も難しく、最も注意を要する。なぜなら、若馬というものは、装勒にも装鞍にもまた調馬索そのものにもまだ慣れていないので、調馬索を嫌い、しばしば反抗するからである。そのため、変な膠着癖を示したり、けがをしたりすることがよくある。だから、ほかの馬以上に注意を払って行うべきである。

初めて若馬に調馬索を行う場合、調馬索手のほかに二人の助手が必要である。一人の助手は、円内にて馬を輪線上に誘導する役目を担い、もう一人の助手は馬の後方より静かに馬を前方へ追う役目を担う。最初は、馬が調馬索に慣れ、輪線上を静かに落ち着いて行進するまで常歩を続ける。それから徐々に馬を速歩に発進させる訳だが、このとき、馬を誘導している助手は、馬と共に走る。このようにして、常歩—速歩—常歩を繰り返し行い、馬が落ち着いて行進するようになったら、助手は静かに調馬索手の方に離れる。

一方、もう一人の助手は、絶えず調馬索手を補いつつ馬を前方へ追っているが、馬自身が自ら輪線上を

落ち着いて行進するようになったら、徐々に円外に退く。そして、最終的に調馬索手のみで調馬索が行なえるようにしていく。

調馬索作業において大切なことは、特に若馬や口の敏感な馬に対して直接索を水勒に取り付けることは、馬の口を害したり、悪癖を覚えさせるものになるので慎重に行うべきである。正しい索の取り付け方は、水勒の上にカブソン頭絡を装着し、そのカブソン頭絡の環に索を取り付けることである。ただし、カブソン頭絡ははずれやすく、馬の目を傷つけやすいのでしっかり装着すべきである。もしうまく馬に合わないなら使用しない方がよい。むしろ無口または水勒の方が安全度は高い。

その他注意すべきことは、若馬に対して最初サイドレーンを用いないことである。馬が調馬索作業に慣れ、正しく輪線上を行進するようになったら、必要に応じてサイドレーンを装着することができる。このようにして馬がサイドレーンに慣れてきたら、徐々にサイドレーンを締め、馬に輪線上に合った内方姿勢をとり、馬の鼻面が垂直線よりわずかに前方に位置するようにサイドレーンを調節する。この際サイドレーンの内方は外方より2～3穴短くし、馬に正しい内方姿勢をとらせる。しかし、矯正馬に対しては、必要に応じてさらにサイドレーンを締め、確実に内方姿勢をとらせる。また巻き込む馬に対しては、サイドレーンを長めに装着し、活気よく前方へ推進する。サイドレーンの装着位置は、水勒の環と調馬腹帯の環とを同じ高さになるようにする。

調馬腹帯には両側に3個ずつ環がついているが、真ん中の環に装着するのが普通である。しかし、矯正馬に対しては一番下の環に装着することも可能で、また馬場馬に対して頭頸の屈撓を求める場合は、一番上の環に装着することも可能である。

さて、調馬索作業における調馬索手の扶助操作であるが、左手前の場合、調馬索手は左足を軸にして円の中心に立つ。そして、左手に索を右手に追いまちを持ち、身体の正面を馬の肩の方向に向ける。しかし、必要に応じて馬の後方に立ち、追うこともあるが、その位置はあくまでも馬の状態に応じて決める。また注意すべきことは、決して馬の前方に立つてはならないということである。さもないと、馬の前進意欲がうすれ、さらには膠着につながるからである。索は馬の口と同じ高さに保持し、進行方向へ軽く馬を誘導する。そして必要に応じて、いつでも索を速やかに伸ばしたり縮めたりできるようにしておく。

追いまちは、普通その先端が馬の後方に位置するように保持する（だいたい飛節の高さ）。そして、馬を前方に追うときは、追いまちを馬の腰角の方向へ下方より上方へ上げる。しかし、怠惰な馬の場合は飛節の上方に軽く追いまちを当てる。また、馬が内側へ入って来るときは、追いまちを馬の肩の方向へ、下方より上方へ上げて防ぐ。このようにして馬が確実に輪線上を行進し始めたら、再び追いまちは馬の

後方に向け、必要に応じて使用する。そのほか、速度を落とすときは、音声と共に索で軽く半減却扶助を与え、追いムチを下方に下げる。

調馬索作業によく慣れている馬は、音声だけでも停止し、また常歩・速歩・駆歩も容易に実行する。音声というものは、調馬索手の動作と共に、人馬間の親睦を図るのにとっても重要な役割を果す。それによって、後日の作業を円滑に進ませることができる。

停止は必ず輪線上にて行わせ、かつ不動姿勢をとらせる。そして、手前を変えるときは、追いムチの握り部分を前に出すようにして脇に抱え、索をたぐりながら馬に寄り愛撫する。その後、索を反対側に取り付け、サイドレーンの長さを調節して、確実に新しい手前の内方姿勢をとらせる。そして、索手は馬に前肢旋回をさせるようにして手前を変え、再び徐々に馬を輪線上へ誘導する。

調馬索作業において馬に要求する歩度は、活気のある尋常歩度でしっかり歩かせる。若馬においては、初めは駆歩はあまりさせず、速歩までにとどめておく。しかし、馬が落ち着いて駆歩にでたら、無理に速歩にすることはなく、短時間ならそのまま駆歩をさせておいても構わない。また、馬が正しく輪線上を落ち着いて行進するようになったら、徐々に駆歩を試みてもよい。

調馬索にて馬の心身をほぐすのが目的の場合は、初め常歩と速歩を繰り返し行った後、速歩と駆歩を繰り返し行う。

速歩を主体とした場合、常歩（半周）—速歩（1～2周）—常歩（半周）を繰り返し行う。

駆歩を主体とした場合、速歩（半周）—駆歩（1～2周）—速歩（半周）を繰り返し行う。

このような歩法の変換は、馬の心身を速やかにほぐすのに効果があり、またそれによって馬の前進気勢および弾発が生じてくる。もちろん、調馬索作業の初めは馬によっては落ち着かないで、すぐ駆歩にできるものもいるが、馬が落ち着いてきたら、このような運動の仕方をする。

このようにして、馬はだんだん調馬索作業においても、騎乗しているときと同様の索手の意志を理解し、扶助に従うようになる。調馬索は馬を疲れさせるのが目的でなく、騎乗に際しての心身の柔軟性を養い、その後の作業の準備または補足を目的とするものである。それ故、索手はよく馬の状態を判断し、適切な調馬索作業を行うことが大切である。

調馬索作業における体重扶助は音声であり、脚扶助は追いムチであり、調馬索は手綱扶助に相当する。基本的には騎乗時の騎手の扶助操作と全く同じである。

自由飛越

計画的な自由飛越は、障害馬の調教においてとても重要な要素を含んでおり、訓練上において良い効果を与える。自由飛越の目的は、馬の背の柔軟と背筋力の鍛練としなやかさの促進にある。そして、それによって馬は騎手の扶助操作に束縛されることなく、自分自身で踏み切りを判断し、かつ自然なバランスをもって飛越することができる。

若馬においては、騎乗しての障害飛越のための準備作業として役立ち、さらには馬自身の飛越能力の判断と、その馬の体力の確信を得ることができる。古馬においては、障害飛越に対する新たな飛越意欲を得るのに役立つ。

そのほか、自由飛越は馬全体の柔軟性としなやかさ、さらには動きの機敏性を養うのに役立つので、障害馬ばかりでなく、馬場馬（特に若馬）にも有益である。

自由飛越は、一般的に特に若馬においては1週間に1度行うことが望ましい。自由飛越に先立ち、馬場内（屋内馬場または高い塀のある馬場）の長蹄跡の中間に、壁に沿って1個の障害物を置く。そして、馬の逃避を防ぐために壁に平行して長く柵を置く。さらに四角に横木を置き、丸みをつける。これによって馬の逃避や膠着を防ぎ、速やかに馬を障害物に向かわせることができる。障害物は立体感のあるもので、始めは低い障害から始め、徐々にその要求を高めていく。

自由飛越を円滑に進めるために、3～4人の助手を馬場内に配置する。その後、馬を馬場内に誘導するのであるが、事故防止のための装備を怠らないようにする。特に馬の四肢には肢巻きまたはプロテクター、そしてわんこうを装備して四肢を保護し、さらには馬を誘導しやすように頭絡または水勒（手綱を首に巻く）を付ける。

このようにして準備が整ったら、馬に馬場内の様子に慣らすために、引き馬をしたり、放して馬場内を自由に行ったり来たりさせる。初めての自由飛越を行う若馬の場合は、左手前にて初め1本の地上横木を通過させる。その後障害物をX状に組み立て飛越させる。このとき、助手は引き手または手綱（馬の首に小さくまとめられている手綱）を持って、速歩にて障害物に誘導し、ある一定の地点まで来たら馬を放す。このとき、待機している助手は、馬を音声と追いついで静かに障害物へ追い込む。この際、原則的には馬を速歩で障害へ向かわせるが、もし馬が静かな駈歩になったら、そのまま駈歩で障害に向かわせてもよい。

しかし低障害においては、できるだけ速歩で飛越させる。速歩からの障害飛越は、馬の障害に対する注意力および頭絡の前方への伸展と、背の盛り上がりを養うのに大変役立つ。しかし、初めて自由飛越を行う馬の場合は、馬の欲する歩度を尊重する。

このようにして馬が落ち着いて上手に飛越したら、馬に人参などをあげて愛撫する。その後、徐々に障害の高さを上げていく。初めは1 m くらいの高さまでにとどめ、馬の飛越意欲を掻き立てたところで、その日の作業を終える。後日は、能力と状況に応じて高さや幅を増し、さらには連続障害へとその要求を高めていくが、決して無理な要求は避ける。

また、もし馬が小さな障害にて拒止するようなら、障害まで慎重に速歩で誘導する。このようなときは、馬を急がせない方がよい。また近すぎる飛越も避ける。これらはすべて馬を不安にさせる原因で、拒止につながる。もし馬が2度続けて拒止するようなら、障害を取り外し、横木のみを地上に置く。そして、その地上横木を不安なく通過するようになったら、再び障害物を構成する。障害物は、立体感があり傾斜のついているものが、馬にとって飛越しやすく安全である。

D S Tコラムへのご質問・ご感想をお待ちしております。